

# 平成二十八年度 入学試験問題

## 国 語

### 第三回

【注 意】

- ・試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・問題は一ページから七ページまでです。
- ・解答はすべて解答用紙の解答らんに記入してください。
- ・字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

# 1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

(1) 科学というものが、どんなものなのかを、実は学校では教えていない。科学が扱った対象について、あるいは成果についてならば、あれもこれも教えてもらえる。 **A**、そもそもその科学が何なのか、を説明した文章をあまり読んだことがない。

僕は、これまでに科学関係の本を沢山読んだ。ちらりと見たものも含めれば、何千冊という数になるだろう。それらの中には、一般の人に向けた「やさしい解説書」もあった。タイトルに、「科学とは」というような文句を謳ったものもあった。ところが、中身を読んでも、実際はこんなに楽しい、こんな身近な不思議がある、もっと自然に目を向けよう、宇宙に興味を持つことは素晴らしい、というようなことが書かれているだけで、「科学とは何か」は明確に示されていない。どんなものが科学で、どんなものが科学ではないのか、どこに境界があるのだろうか？

**B**、それが明確に書かれている本も幾つかある。それらの多くは、「非科学」について述べられたものだった。簡単にいえば、オカルトものもある。心靈現象、超能力、UFO、一部の新興宗教、一部の治療行為など、もちろんすべてを同じ集合に入れることもまた非科学的だが、そういったいわゆる「似非科学」に惑わされる人たちに向けて書かれた内容だった。そういった本はまだ少ない。特に、その種のものが本当だ（あるときは科学的だ）と主張する本に比べるとずっと少ない。

時代を遡ってみても、今ほど科学が浸透した時代はない。ほとんど科学的になっていくし、非科学的なものは排除されている。それは、もちろん教育の賜であるし、また情報が広く公開され、法的にも「キセイ」されつつあるおかげである。数々のダイエット法はどのようなだろう。マイナスイオンのエアコンはいったいどんな効用があるのだろうか（それ以前に、マイナスイオンって何のことだろうか？）。★ パワーストーンのパワーって何だ？（僕が一番パワーストーンに相應しいと思うのは石炭だが）。

自分は非科学的なことは信じない、と胸を張っている人でも、家を建てるときには地鎮祭をする。身内で不幸があれば、大金を払って戒名をつけてもらう。また、普通の人ならば、お神籤や占いを気にするだろうし、夜中に墓場を散歩するのも嫌がるだろう。血液型で性格や相性がわかるとか、葬式を友引にしてはいけないとか、いったい誰が言い出したことだろうか？

30

25

20

15

10

5

じっくりと考えてみたら、根拠のない「成り行きのルール」に大勢が今も縛られているのは事実である。おそらく、特に科学的根拠はないけれど、「信じる信じないは個人の勝手だ」という主張だろう。そこまでいなくても、「実害がないのだから、べつに良いのでは？」という寛容だろう。そういうものに支配されている人を「ヒナン」するつもりはない。「従っていれば損はない」「そのルールを破ると周囲から文句を言われる」という協調性が、これらが持続している原動力である。ある意味で、これは集団のシンボル、つまりユニフォームや合唱みたいなものであり、群れにおける「安心」の演出法といえるものだろうから、文句を言う筋合いではない。平和なことだと思おう。

ただ、それらが根拠のない非科学的なものであることを知っているかどうかは大きい。もし知らずにいたら、少し問題だと思う。疑問に思わないことは、非科学的な生き方である。そういう生き方は、 **(2)** で考えれば、明らかに損だ。

周囲の人に合わせた方が良い場合は、合わせれば良い。しかし、そうでない場合にまで何の理由もないことに従わなければならないのは、はつきりいって不自由である。しかも、そういう余計なことは、単に時間を取られるだけではなく、多額の出費まで強いられる。具体的な例を挙げればきりがないけれど、たとえば、「墓を作らなければならない」とか、「仏壇を買わなければならない」とか、そういう類のことである。「高い印鑑でないと不幸を招く」と言われたら従うのか。金を払って運勢を見もらったあげく、さらになにかを買わされるのは、いかがなものか。

いや、いくら非科学的でも、「心の問題だから」と余裕を持って考えられる人はそれで良い。その余裕にはたしかに心理的な価値があるかもしれない。最終的には個人個人の安心が目的だから、個々の問題に口を出すつもりはないけれど、本気で信じている人がいるのだとしたら、やはりそれは問題なのではないか。

ある現象が観察されたとしよう。最初にそれを観察した人間が、それをみんなに報告する。そして、ほかの人たちにもその現象を観察してもらうのである。その結果、同じ現象をみんなが確かめられたとき、はじめてその現象が科学的に「確からしいもの」だと見なされる。どんなに偉い科学者であっても、一人で主張しているうちは「正しい」わけではない。逆に、名もない素人が見つけたものでも、それを他者が認めれば科学的に注目され、

60

55

50

45

40

35

もつと多数が確認すれば、科学的に正しいものとなる。

C、科学というのは民主主義に類似した仕組みで成り立っている。この成り立ちだけを広義に「科学」と呼んでも良いくらいだ。なにも、数学や物理などのいわゆる理系の対象には限らない。たとえば、人間科学、社会科学といった分野も現にある。そこでは、人間や社会を対象として、「他者による再現性」を基に、科学的な考察がなされているのである。

この「他者による再現性」を確認するためには、同じ分野の学者、研究者、専門家が相互に情報交換をしなければならぬ。情報を公開しないと、それを他者が確かめることができない。したがって、秘密裏に行われる研究というのは、結果だけを公開しても「科学」にはならない。

③ 実験をすれば科学的だと勘違いしている人もかなりいるようだ（これについては、学生を対象に簡易なアンケートを取ったことがあるが、工学部の学生の7割近くが、科学は実験によって立証されるものだ、と答えた）。TV番組などでよくスタッフが行った実験映像が示されることがあるが、同条件の実験を他者が行って同じ結果が示されなければ、科学的な証明とはいえない。実験というのは、いろいろな要因が紛れ込むし、また測定にも、実験者の意志がどうしても介入しがちである。

TVでやっていた、新聞に記事が載った、特許が現に取られている、というものであっても、科学的に証明されていると信じることは、キケンである。TV番組や新聞で報道されることは、誰かが持ち込んだ記事であり、TV局や新聞社はそれを自分たちで検証するわけではない。特許も、特許庁が正しさを確かめているわけではない。いずれも、単に書面を見て特に不自然なところがないか、という大雑把な審査が行われるだけだ。

まして、書物などで個人が書いている内容になると、もうほとんど「正しいかどうか」など問題外である。なかには、引用文献を沢山挙げれば、それだけ信憑性が増すと勘違いしている人もいる。ちなみに書いておくと、僕は自著で「キョクリョク引用をしない。「大勢が同じことを主張しているから正しい」「有名な人が言っていることだから正しい」ということはない、と考えているからだ。

そういった本に書かれていることは、一つの観察事例として、心に留めておけば良い。別の道理からそれが正しいと証明されるときもあれば、否定される場合もあるだろう。

もちろん、すべてを自分で確かめられるわけではないので、できるだけ

95

90

85

80

75

70

65

大勢の意見を聞き、情報を沢山集め、吟味したうえで、個人は判断をしなければならぬ。白黒をはっきり決める必要はない。すべてをそのままデータとして留め、確からしいものから、疑わしいものまで、そのときどきの判断で並べておけば良いだろう。

たとえ自分の目で見て、正しいとは限らないのだが、それでも、幽霊やUFOは、今のところ、それを信じない人たちの前で再現されたことがないようである。超能力者は、再現できないときに言い訳をする。「疑っている人間が見ていると能力が発揮できない」といった理屈らしい。超能力も幽霊も、それを信じる人の前でしか起こらない現象だということ。そこまでいくと、「信じなければ救われぬ」という一種の宗教ではないか。

繰り返すが、実験によって確かめることが「科学的」なのではない。たしかに、実験を行って現象を再現する手法は、科学において多用されるが、実験結果は常に正しいわけではない。実験結果は現実であり、明らかに事実だが、条件の設定で勘違いや間違いがあったり、測定や分析にも（人間のやっていることだから）不正は混ざる。

D、「真空中では、どんな物体も同じ速度で落下する」ことを証明するために実験を行おうとしても、完全な真空を作ることとはできないし、また「同じ速度」を厳密に測定することは不可能である。実験で観察できるのは、「真空中にかなり近い状態では、物体はほとんど同じ速度で落下するようだ」という、いわば近似的な結果だけである。

しかし、こうした実験を多くの人が試み、数々の条件下でも同傾向の結果が得られるようになる。次第に精度も高まっていく。高精度になるほど、結果も仮説に近づくようだ。そういった結果を総合して、その仮説がどうやら「正しい」という認識がだんだん生まれてくる。そのプロセスが、すなわち「科学」だ。少なくとも、その仮説を信じるとか信じないとか、そういう観察者の精神的な状態には影響されない。

（森博嗣『科学的とはどういう意味か』）

★オカルト……………神秘的な。超自然的な。

★似非……………ほんものに似ているが実際はまったくちがうもの。

★パワーストーン……………特殊な力を持ち、身につけるなどしていると良い結果がもたらされると信じられている石のこと。

★プロセス……………過程、行程。

120

115

110

105

100

問一 — (1) 「科学というものが、どんなものなのか」とありますが、「科学」的であるためには実験によってどのようなことを証明すればよいのですか。解答らんに行以内で説明しなさい。

問二 (2) に入れるのにふさわしい二字の熟語を自分で考えて書きなさい。

問三 — (3) 「実験をすれば科学的だと勘違いかんちがいしている人もかなりいるようだ」とありますが、なぜ「勘違い」なのですか。解答らんに行以内で説明しなさい。

問四 A  B  C  D  に入れるのにふさわしい言葉を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア もちろん イ しかし ウ たとえば エ このように

問五 次の一文を文章の適切な部分もとに戻し、直後の五字を答えなさい。(ただし読点や記号は字数に数えません。)

だが、それでも、身近なところに非科学的な事例は沢山ある。

問六 筆者は「科学」とはどのような営みであると述べていますか。「科学は」で始めて解答らんに行以内で説明しなさい。

問七 — (ア) (オ)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八 本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 引用文献びんげんを沢山挙げている書物は、他人の権威けんいによって自分の意見を他者に信じさせようとしているだけで非科学的なので、信用できない。

イ TVでやっていたなどと言っても、TV局の都合のいいように事実がねじ曲げられている可能性があるため、科学的に証明されているとは言い切れない。

ウ もちろん全てを自分で確かめることなどできないが、その時々ときの状況じょうきょうによらず科学的な推論を行うためには、情報を収集し、吟味ぎんみして白黒をはっきり決めるべきだ。

エ 超能力ちゆうのうりよくや幽霊ゆうれいは信じない人の前では現われないというので、その存在の有無を判断するためには、まず一度超能力や幽霊の存在を信じるところから始めるべきだ。

② 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

(じゃあ、鹿児島の方にも行くのかな)

話を聞いてみると、どうやらサエさんの旅の日程は、その日の気分で決めるらしい。だとしたら、長崎に行くついでに、鹿児島まで行ったりはしないだろうか。

「まあ、予算の都合もありますからね。せいぜい一週間くらいしか行けないですけど」

そのサエさんの言葉が終わったところで、ハヤトは思い切って口を開いた。

(1) 「あのう……もしかして、鹿児島に行ったりしますか？」

「鹿児島？」

サエさんばかりでなく、父さんとミチコさんまで声をそろえて言った。

「いや、鹿児島の方までは行かんと思うけど……なんで？」

サエさんは不思議そうに首をかしげた。

「いえ、行かないのなら、いいんです」

「うわっ、この子、メッチャ気になる言い方しよる」

ミチコさんや父さんと顔を見合わせて、サエさんは笑った。

「ハヤト、いきなり、どうして鹿児島なんだ？」

「別に……何でもないよ」

父さんに聞かれて、ハヤトは思わず視線を逸らす。

実は、チラリとこんな風に考えたのだ——もしサエさんが鹿児島に行くなら、トンダじいさんのオルゴールを持って行ってもらって、どこかに埋めてきてもらおう。本当なら、ある町に住んでいるという女の人に届けた方がいいのだけれど、どうしてもムリなら、それでもいいとトンダじいさんは言っていた。その人も、かなり歳を取っているはずなので、すでに亡くなっているかも知れないからだ。

「そうやなあ……鹿児島は、メッチャええところらしいな。桜島もいっぺん見たいし……そやそや、特攻隊の知覧もある。あそこも、やつぱり見たい方がええところや」

ハヤトの顔をチラチラ見ながら、サエさんは言った。

「だから、ハヤトくん、言うてみ。話によっては、行かんこともないで」

確かにサエさんに預けることができたなら、オルゴール問題は一気に片が

30

25

20

15

10

5

つく。後はサエさんがどうしようと、自分の責任ではない。

ハヤトはみんなの顔をぐるりと見回して、話すべきかどうか、かなり迷った。サエさんだけに話せたら一番いいのだけれど、それもできそうにない雰囲気だ。

「実は……大したことじゃないんだけどさ」

ハヤトはトンダじいさんからオルゴールを預かった経緯を、ゆっくり順を追って話した。ただし——お金をもらってしまったことだけは、どうしても言えなかった。そんなことまで正直に話したら、絶対に父さんに叱られるに決まってる。あくまでもトンダじいさんがかわいそうだったから、引き受けたことにした。

「えらいっ」

ハヤトの(2) 話が一通り終わったところで、いきなりミチコさんが大きな声を出した。

「初めて見た時から、心の優しそうな子やって思ってたけど……やつぱりハヤトくんは違うな」

「ほんまや。十歳かそこらで、人にそこまで同情できるなんて大したもんですよ」

サエさんまで、つくづく感心したように口を挟む。

「そのおじいちゃんはその後で亡くなってしまったんかいな」

「きつとハヤトくんがオルゴールを預けて、安心したんやろうね」

女の人二人が感激した口調で言い合っているのを見てると、(3) 何だか胸のあたりがチクチクした。ミチコさんなんて、ほとんど涙ぐんでいるくらいだ。

本当は、そんな立派なものじゃなくて——先払いしてくれるというお金で、ゲーム機が欲しかっただけなのに。

そう思いながらチラリと横を見ると、父さんは何か考え込んでいるように、お酒のグラスにじっと目を落としていた。

「そのオルゴール、見してくれへん？」

「いいですよ」

サエさんに言われて、ハヤトは足元に置いておいたリュックから、小さな巾着袋を取り出した。ふだんはお弁当箱を入れるのに使っているのだけれど、大きさがちょうどいいのでオルゴールを入れてきたのだ。さすがにガーゼのハンカチ一枚で包んだだけで、リュックに放り込むのはマズいと

60

55

50

45

40

35

思えた。

「へえ、これかあ……確かに古そうな品物やな」

「でも、きれいなもんやね」

トンダじいさんのオルゴールを見ながら、サエさんとミチコさんは口々に言った。

「ハヤト」

それまで黙っていた父さんが、いきなり口を開く。<sup>(4)</sup> どこか怒ったような、不機嫌な口調だ。

「おまえ、どうして……そんな安請け合いをするんだ」

ハヤトは思わず、父さんの顔を見た。

「おまえは子供だろう？ 鹿児島なんて遠いところに、どうやって行こうと思っただんだ？」

「それは……そのおじいさんは、大人になってからでもいいって言うていたから」

「大人になるまでには、どうにかなると思っただけだ」

もしかすると父さんは、自分が引き受けてしまったことを怒っているのだろうか。

「やれやれ、そのじいさんも罪作りだな。まだ十歳の子供に、そんなことを押し付けて……簡単に引き受けるおまえもバカだぞ」

「ヒデちゃん、そういう言い方は」

「ミチコは、ちよつと黙つとけ」

言葉を挟もうとしたミチコさんに、父さんは鋭い口調で言った。

あんな言い方をしたら、ヒトミさんなら絶対に怒っているところだけれど——性格の違いか年の違いか、それとも東京と大阪の違いなのか、ミチコさんは出しかけた言葉をグツと飲み込んだ。

「大人になるまでなんて軽く言うけどな、あと十年はあるだろう？ 子供の十年っていえば、けっこう長いぞ。おまえはその間、そのオルゴールを見るたびに、『鹿児島に行かなくっちゃ』って思い続けるわけだ。そういうのって、ものすごく負担になるぞ」

実際、半年も経たないうちに、気になって仕方なくなっていたのだけだ。

「本当に、言う方は簡単だよ。適当に人のことを持ち上げといて、面倒くさいことを押し付けちゃえばいいんだから……世の中、そんな連中ばっか

95

90

85

80

75

70

65

りだ」

父さんの言葉には妙にトゲがあったけれど、ハヤトには言い返すことができなかった。

ふと公園のベンチに座っているトンダじいさんの顔を思い出す。

トンダじいさんは、イヤなら断ってもいいと、ちゃんと言っていた。それなのに、お金が欲しくて引き受けたのは、自分なのだ。ハヤトはそのことを言おうとしたけれど、どうしても言葉が出てこなかった。

「そんなもん、捨てちまえよ」

どれほど世の中の人たちが自分勝手なのか、さんざんにこぼした後、それこそ言葉を捨てるような口調で父さんは言った。

「えっ」

ハヤトは思わず父さんの顔を見た。一瞬、自分の聞き間違いか……と思っただけだ。

「元をただせば、そのじいさんが勝手なことを言うのがいけないんだ。東京から鹿児島に持っていけだなんて、子供に頼んでいいことじゃないよ。どうせ、そのじいさんが死んだ後、家財道具は誰かが始末したんだろ？ その時に、そのオルゴールも一緒に捨てられたんだと思えば、同じことじゃないか」

もしかすると——心のどこか深い深いところで、自分は父さんに、こう言っただけだったのかもしれない……とハヤトは思った。

『そんな約束は、破っても少しも悪くない。だって元から無理のある約束なんだから……投げ出してしまっても、いいんだよ』

そんなふうに父さんが言ってくれたら、本当に楽な気持ちになれるだろう。お金をもらってしまったことは、黙っていれば誰にもわからない。シンジロウは知っているけど——ちゃんと大人に頼んできたと言えば、うるさいことは言わないはずだ。

大阪に来る時、自分の中に、そうなってくれることを期待する気持ちがなかったわけではない。いや、確かにあった。

父さんにそう言ってもらえるなら、トンダじいさんとの約束を破っても、自分は平気でいられると思っただけだ

それなのに……期待していた言葉を父さんが言ったのに——<sup>(5)</sup> どうして、こんなに悲しいんだろう。

ハヤトは自分の考えがわからなくなった。

130

125

120

115

110

105

100

いったい自分は、このオルゴールをどうするつもりで、わざわざ父さんのところに持ってきたんだろう。

考えれば考えるほど、それはわからなくなるような気がしたけれど——たった一つ、ハッキリとわかったことがあった。

自分は、父さんを尊敬していたんだ。

父さんが有名なお菓子の会社を辞めたのは、工場で古い材料を使っていたのを、外に通報してしまったからだ。そのために会社は世の中の人に怒られ、信用もガタ落ちになってしまった。それで会社が父さんを中心に怒られたわけじゃないけれど、陰で裏切り者のような扱いを受けるようになって、居づらくなってしまったのだ。

ヒトミさんは、そんな父さんをバカだと言った。

そんなことは父さんでない誰かがやればいいことで、小さい子供（その頃、ハヤトは保育園に通っていた）を抱え、これからお金が必要になるような人間がやらなくてもいい……と思っていたのだ。

もちろん父さんだって、そんなことをしたら、どれだけ会社に居づらくなるか、わからなかったわけじゃない。けれど、小さい子供がいたからこそ、黙っていられたのだったと、前に父さんは言っていた。

古い材料で作ったお菓子なんか、自分の子供に食べさせたくない——自分がそう考えているなら、世の中のお父さんやお母さんも、きっと同じように考えているはずだ。そう思うと、とても黙っていられなくなったのだという。

その会社を辞めたせいで、マンションを買う計画がダメになってしまい、怒りたくなるヒトミさんの気持ちもわかる。けれど、その時のハヤトには、テレビで活躍している変身ヒーローよりも、父さんがカッコよく思えた。

だって父さんは、たくさんの人を守ったのだから——変身もしないし、ロボットも操縦しないけれど、父さんは間違いなくヒーローだ。

それから離れて暮らすことになり、ヒトミさんの前でおおっぴらに父さんの話ができなくなっても、ハヤトは心の中で父さんを尊敬していた。たとえヒトミさんが何と言おうと、父さんは自分のヒーローだったのだ。

その父さんの口から、「オルゴールを捨ててしまえ」なんて言葉を聞くと——何だか涙が出てくる。

急に目の前が滲んだのを、ハヤトは慌てて手の甲で拭いた。

（朱川湊人『オルゴール』）

160

155

150

145

140

135

#### 問一

——(1)「あのう……もしかして、鹿児島に行ったりしますか？」とありますが、なぜハヤトはそのようなことを聞いたのですか。解答らんに三行以内で説明しなさい。

#### 問二

——(2)「話」とありますが、「話」を使った次の一〜五の慣用句の意味を後の「意味」ア〜オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

一 話が弾む 二 話がわかる 三 話の腰を折る

四 話にならない 五 話に尾鰭がつく

【意味】

ア よぶんなことをつけくわえて言う

イ あきれてものが言えない

ウ 世間の事情に通じていて物事に理解がある

エ 話が活気がつく

オ 相手が話しているのに口出しをして話のじゃまをする

#### 問三

——(3)「何だか胸のあたりがチクチクした。」とありますが、ハヤトはなぜこのような気持ちになっているのですか。解答らんに二行以内で説明しなさい。

#### 問四

——(4)「どこか怒ったような、不機嫌な口調だ。」とありますが、この時の父さんの気持ちとしてふさわしいものを次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 重大な頼み事を深く考えず引き受けてしまった息子の浅はかさ  
を腹立たしく思うが、普段の生活を共にしていないため、叱りつけることをためらっている。

イ 大切な息子に重い負担をかけた無責任な老人に対して怒りを覚えているが、すでに亡くなっているのどうしようもないと半ば諦めている。

ウ 息子の状況が、かつての自分の苦しかった時と重なり、自分さえよければ他人はどうでもよいと考える人の多さにうんざりしている。

エ たとえ離れて暮らしても、頼まれたら断ることができない人のよさを受け継いだ息子を誇らしく思いつつ、同時に歯がゆく感じている。

問五

——(5)「どうして、こんなに悲しいんだろう。」とありますが、ハヤトはなぜ悲しいのですか。解答らんに行以内で説明しなさい。

問六

本文の表現を説明したものとしてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ハヤトの視点から会話を中心に、子どもらしい平易な表現で構成されており、心情が細やかに描かれている。

イ ガーゼのハンカチやオルゴールといった象徴が多用されており、物語に深みを持たせることに成功している。

ウ 時間や場所を自由に行き来しながら物語が進んでいくため、読者は登場人物の背景を自然に理解できるようになっている。

エ 登場人物のさりげない動作を細かく記述することで、その人が何を考えているのかを明らかにするという独特の手法を用いている。

問七

ハヤトの人物像としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア どこにでもいる今風の少年で、何事にも消極的であったが、父親の話になると途端に眼を輝かせていきいきと話をする子供であった。

イ 人はよいのだが、楽な方に流されがちで結果的に責任感に欠けた振る舞いになってしまうこともある。

ウ 困っている人を見ると放っておけない優しい性格で、正義感も強いいため間違っていることは例え年上でも指摘する。

エ 泣き虫で自分の思った通りにならないとすぐに涙がこぼれてしまうが、人の気持ちを汲むことができる繊細さも持ち合わせている。

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父親は既にミチコさんと新たな家庭を作っており、昔を思い出させるハヤトの存在が煩わしくなったため、はやくオルゴールの件を諦めさせようとした。

イ お金をもらってオルゴールを預かったということを知っているのは、ハヤト自身を除くと一人しかいないので、その事実を隠し続けることに決めた。

ウ はやくオルゴールの約束から解放されたいと思っていたが、いざそうなってみると自分を頼ってくれた人の手前かえって諦められなくなってしまうた。

エ 父親が会社の不正を通報したのは周囲にそのかさされたからであり、結果的に離婚するまでに至ったことを非常に不本意に感じている。